

武藏名所考

冬

L2903

→

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

武藏名所考卷四

晃嶠陳人編



堀兼井

名所抄に武蔵注に入間郡類字名寄松葉並に載と名
寄に堀兼井に作る歌林載せと

枕草紙に云井と云りこの子の井

八雲御抄に云りかねの井武蔵

丈木集に云りこの子の井武蔵

藤垣草に云堀兼井武蔵入間郡

義經記に云ありこの子の井と云りこの子の井と云り

省れりけり安座府天徳寺に未申のかこ何のれ後
園に在るといふぬ

志料よ云堀の井八入間郡川越に在るゆゑ今俗
説江戸砂子にも牛込邊坂の志に在るといひぬそれ
より先此書にかくの如く志をせり一瞬軒八束那の人
ゆゑ志ぬもあつたりあるに麻布天徳寺の志に
存すゝ志へかくいふ人そそのいふる人そや云云天徳寺
あつたに麻布にあり

江戸砂子よ云堀兼井牛込邊坂の堀りと里後よ曰徒
母の後よよりとそその父に井川やうはよけりそよ
て死よのと名と及と也又多摩郡中野の先よもかり

かひ乃井といふあり

按よるに今年に堀兼井と云井二所ありひと
手飯の下筑紫氏乃屋敷の跡に在ひつゝ八箇士見
馬場久保氏の屋敷乃ちちよ在

諸國里に後よ云武蔵國入間郡堀金村よ小高き山よ
浅間宮の麓よと云く窪めふふよ堀金井の跡あり方
六尺より石段築して井柵とくくす八堰とて若むより
傍よ碑有近き頃川越を此武士乃これと遠く也川
越より二里未申の方けありに堀兼井と稱する不
此系浅間堀のよと云也此より又六町南よ方二十間
よりから堀の如く窪め敷不これと云の井は法也と云

又乙女新田盛志入間の里にもあり惣して此所を地を
うらと水とゆがく一伝く堀のいふところのい里傳うく是れ
を迷りたる之堀金の名かきこは堀金井とのい堀兼の
字と書しりの中この西伝うくかたなり

按とるに近江比達一とのい八寶永五年戊子此碑
かり其文は此凹形之地所謂堀兼井之蹟也恐久而
遂失其處因以石井欄置坳中削碑而建其傍併以
備後監里俗堀而難得水故云爾以兼通難未知只
從俗耳寶永戊子年三月朔と有秋元但馬守の建
し系と云

武藏野地名考よ云堀兼井入間郡の内より何越

城より三里とあり府中より又三里と堀兼といふ里あり
堀兼と云事此不土地をさう故よ二級にあり下き
一級と下りて井の深さサ尋とありよさるは武藏野
のうちたくと井深なるは十尋なりとて水をほねる
早に急くと水必このくなり堀かこの井ハむのより
して水たゆることあり

再按江戸砂子よ云堀のい井正にあり赤坂清門の
うち岡部家やよきの内西に谷よあるとをりおね
の井と云中たり又近年怪き一書ありと傍何
うといふ傳の附此井と尋ぬ其人知事てんじ
をいめ人を語明白よ志れたるおのむたとのすこと

まこと信しつゝ記すことあり

江戸志よ云堀兼井の説諸書よりわくあり或記よ
いふ河越のうら堀兼井の流と云ふ所ありまら流
同宮の下にあり成るものと云ふ事この俗よせんけん堀兼
と云ふの外二所あるにけ下堀兼より戸なりかひとて
あり

按するに河越のうらといふは誤と河越のうらと
いり戸ハ入首の誤あるべし

武蔵志料よ云堀兼の井も河越の南よて所入間郡と
言井戸ハともかくは満つとく多摩郡ありとの事疑し
むとらくハ今言井土といふこといふは後人の書入あり

又高井土乃ほつとりよ入間村有れいなるべし

武蔵堀兼井事實よ云土人の口碑よ日本武尊東夷
征伐乃濟時武尊の水之く諸軍渴よ及なれハ武尊
民とく為よ井成堀しむるに牧笛不鳴とく水を得
されハ龍神に余とて流を引しむる今是と不越年川
と云或ハ入間川のうらともいふ亮盛
碑と建たる事ありと載と

按するに今云入間川と稱するは源と宮寺と云
より後ハ南入首村を經とく新河岸川よ入首
川とのある小流あり

武蔵志稿よ云入間郡南入谷村ホリカ子ノ井

按するに谷の字ハ首の誤なり南入首村よ七曲あり

井と云ありこれをも堀子の井と今いひ傳ふ
後よあつと

三芳野名所舊跡記に云淺間社入間郡之内堀兼村に
在り社を慶安三年に松平伊豆守に遠立たり川越の
南二里余あり堀兼を堀金と書る非あり

又云堀兼井武蔵野古跡にも名なきに云此井は淺間
の社山の裾に方貳間ほどの凹の地其内の方を間と
いりの石の井あり半八土に埋り則堀兼の井は古
跡に又此を堀兼の井と稱する如多し此南六七丁
程ありて井跡あり又入舟村と云ふも七曲りの井と云
あり江戸四谷ありと云ふ井と云ふありと云ふあり

武蔵野方數百里の廣野に多く人家あり此淺間堀兼乃
井と云實の古跡なるべし

武蔵演路に云堀兼井堀兼村小き山に淺間大権現
宮あり少く宮は堀兼井の蹟あり方六尺ありあり
石伐掌に井ありは堀兼に若むあり傍に

基の碑あり云俗に松平伊豆彦川越城の頃建ら

るに此碑室永成子建る所と云ふれと豆加正と云ふは

今淺間宮の下に在り上は堀兼村に宮あり蹟と
と云ふまことの變は是より二三町脇小きありあり

今麓茅のそけり堀兼あり其石七曲りと小名と云は
まことの古跡と後代に少きなりありは是より後年

その形さうせまくたゞ窟らふのこぼさるゝその十四箇
家を堀金村と七ヶ所北入芳村と三ヶ所北入芳新田と
二ヶ所南入芳村と二ヶ所堀金村の七ヶ所一ヶ所浅間
の社の傍と一ヶ所二ヶ所小名原と一ヶ所道のやうふ
下和云ふ小名原と下と一ヶ所度孫右衛門といふものゝ家
の裏と二ヶ所和興八といふものゝ屋敷と一ヶ所仁右衛門と
いふものゝもて堀の中は二ヶ所あり一ヶ所今堀といふ北
入芳村の二ヶ所一ヶ所小名原橋場といふ所の観音堂のう
しろと二ヶ所 逆きうし此井沢邊のりた文保三年寛正三年の碑をゆかり
今観音堂といふを正しけしもの豊後大堀兼の井はさうしう
とあり 二ヶ所は小名原のせうといふものと二ヶ所三ヶ所小名原
といふものゝ家の前と一ヶ所河内北入芳新田乃二ヶ所

一ヶ所森を湯といふものゝ地と一ヶ所二ヶ所とをその傍より
の畑中にありと比兵衛井戸と稱するもの一ヶ所南入
芳村の二ヶ所一ヶ所金剛院といふ寺は裏門乃外より
下和云ふ市を湯といふものゝ家の前と一ヶ所あり
土人を堀兼村のと除きさう入芳の七ヶ所井戸と云ふり
其外と又堀兼村の内小名原と下たふを湯といふもの
家の前とある俗ふかんく井戸と稱するあり此井は
水もあり七曲の類とあるねと古記井といふり
又堀兼村下奥富村青柳村も古記井乃はあれとこれ
らうを水なりといふ人又四説と云堀金村浅間の社乃
傍と云ふ説りて家の堀の井ありんと云ふと此西八

新田地うへへ村を塚金と名付けハ遠くぬ世乃
事と土人をいふ村名をかたむく実海と定むるも
此を来たうくや土人のいのかうり紙書くらむりハ今の
浅間の社の名に傳き古井の記あり一人のから入ん
る事と伝をきくいつの頃つこれを埋め土城言くゆり
あけそのよと浅間の神をまつまうり今石の井けを
ほくりしとあるその古跡紙うりあるとあり新ふ
りりしとをまき諸國里人後三芳野田跡記と浅
間より五六七町南と井の記ありと載るは上より
いふ山名基といふ所のより之は戸志といふけ下あり
このよといふ事す外ら孫吉兼門與八仁宿兼門等の

井のより之のありりといふ事とあり北入芳親着
豊のうへへ海に在る井のよりすといふけあり地言く
して水を伝かされといふ方も井もこれ塚のあり
宗久藤日記と塚のみの井ありかといふありりしと
いふ事とあり今そのとありの事と十餘の蹟ありて
これをよとよといふ事といふありと互に事とあり
つけきむりし井は堰といふ事といふ事とありりしと
逸の井ありむりしこれほりかといふ事とありりしと
舟と事といふ事とありしと波の棧もむりしと山名
とありしとありしとありしとありしとありしとあり
しとありしとありしとありしとありしとありしとあり

へきふく多々かり今たましく一不之限り棧の古
蹟と傳ふるあり又太平記之堀金に作りしこれハむ
のけ付地よりこの跡を堀のせむるよりの名多しんと
いふ人あり金沢ほりこるより惣りり一名多きは金
堀とやいつ毎に綿織徳積鳥取たしとゆるは和語
たのこかくの如し一用代先りしと體を後之抄に
唐語之限るありこの古歌にも堀のほく水あき
心よめふよそこのの事ハ何らさる流と今人し

大伴家持卿 家集

むさくたるほりかねの井汲きてこれ日之暑さあたえぬる毛

伊勢 家集

いそかく思ふ心あほほりこの井よりも物を流さすさきほ

同 秋枕名寄

武彦の堀兼乃井の底と流と思ふ心代何よりあしと井

紀貫之 家集

とあしとねのひこ井やれ武彦野のほりかね井よ野寺のまよ

源俊頼朝臣 家集

あさかるとねの人はこそ六ほののせわりかねの井は流さし力

西行法師 家集

汲くしほ人もあつらんあつらん堀兼井乃底はこころ代

藤原俊成卿 千載集

武彦野のかりこのね井も有のさうれく水はちのまきよけ

慈鎮和尚拾玉集

今ハわき浅きころを忘れ水いりなり乃井作らるらん

後之我太政大臣

源通光公
秋枕名寄

ほりのわきあはれきくむしつ井のれきとな井波のしん草

冷泉太政大臣

藤原公相云
史本集

むきし井也堀兼乃井の深くのと深きと増るよもの夏草

堯憲法師 北園紀行

井とて深く壁のあまたなりむきと深のほりむし井の深かかねと

道興准后 田園雜記

井をかふるよ深きむきし井なりむねの井に水をなれ也

同

昔たれむきくくの名然とあく水也と野とほりかこのおそ

逝水

松葉に載せ名寄に未勘の部よ裁と名取抄類字歌林裁せり
史本集よ云ぬけの武彦

諸國里人後よ云逝水武彦野よ在まきとれ水よあは武
彦野の深置の事をもくくせきとくうらかある甚の定よ
地名きてこまこよりいんれとまれき事武彦とるく水乃流
るぬくよいゆかこの水よありこれハそのけりて又向
よ流るぬくれ氣ありいし事よてもその水武彦定めとれ
りて先之れと逝水くやう水乃あよかく名付てり甚より

其のけく有り秋をむかす

武蔵野地名考よ云按よむさうはよ迹ありと云地名あり
堀桑村のありりよ年とて川と云細き流あり其分れ
敷をきつめとくあのがるきさる川也奇異のり之移とも是
を迹水といふも便なりや或人の白露雨の頃武蔵野
をゆく野原のほろある所を水溝と通ひのりてこれを
よけく野原をよけといふともある水あるれと草根を
沿のりて此時往及の人定るるぬ道越るていふも
さゆといふありたかきと吟ひわさむさうのり今れこれ
ることよて年の八九月霖よきとてハ必あるるあり人
の曰これせん迹ありと云へきれ古ありともむさう此の事と

これよゆく多れ迹かきてもとあれとこの名と事と相
符とるもや

武蔵遊草よ云迹ありのりハ古老傳人いひて其の頃小
川新田といふ所の一本榎といふありりより野白天王社の
色あるハ武蔵野地蔵といふ色まきありしよとあれとを
今も民家こもてを伝まきりて武蔵野の傳ありゆき
迹あり絶たり

按よるに田祝或を陽炎とて或を行潦といふと
と毛源俊頼頼臣の迹かきても世伝といふはつか
りる事と於て切なりとさるる如く物ありと本則多
摩川のなりり土地墳起せる所とては水地中よ依

穀里よりと涌出るもの有豊高郡石神井村三寶寺
池多摩郡井草村善福寺池牟礼村井沼池等とこれ
多摩川の伏流なるんと言説あり義濃國醒井の亦
毛若老の湧れ伏流之といひ西土齊州酌突泉之水
阿達とかうやうれきありなりと守へるに逃かす所と
いふ歌と於てハ伏流と守ることを獲るゝ免余此説を
得て後三芳野名所舊跡記とよみしに三説と得
たりてハ武彦時之逃る水と非と曠たる系龍に
水如こより見れば其末の水の流るゝ如くこゝに
其水よりと見れば水あり又其向れたるの如くこれハ
り程是之逃りやうある故と逃ると名と呼ひ也

二つは水野村と云ふ所の郷深^{ケスミ}水野忠助と云ふの居る
處に山川有藪の中を流き入り地中を志と逃る流
の末あり是は逃水といふ三つは宮寺郷と云ふ所の
年々と川と云ふ有畑の方より涌出る川に成り夏
の大雨とく出水の前ハ怪我人孫あり毎年大晦日
至りて水流る事なりと第一説といふ多野村ハ入
間郡山田庄川越領よりて堀金村と隣る余は海
忠助の家といひたり見るとかの説のこゝに小川あり深を
これハ宮寺郷のなりよりせりなりと云ふ事二里
許之今も藪ハなご川^{ナゴ}の末堀切とありては其の
又六間より上鏈の事とありては多野とハ潺湲

流るるまじと堀切の石とあるまじと水とありとまじと流るる
まじとまじとの源紙の石とまじと三尺餘とありとまじと
とありとまじとの説と類せりまじとまじとまじとの説ハ推量
ありとまじと此の地村ハまじとの院現ハありと遊水ハまじと
こまじと定むへまじとまじとまじと新田地ハまじと人
家もまじとありと一紙忠助の先祖あるまじとのけりまじと開
きとまじとあり

源後頼朝臣家集

東路ふありとまじとありまじとありまじとありまじとありまじとあり

入間里

名寄松葉と載と名寄ハ入間郡哥里也有郡哥里故可尋之
と云名不抄類字歌林載せと
續日本紀と云稱徳天皇神護景雲二年秋七月壬午武蔵
國入間郡人正六位上勲五等物部直廣成等六人賜姓入
間宿禰

拾芥抄姓尸錄部宿禰の下と入間あり

延喜式と云武蔵國入間

和名抄と云武蔵國入間 伊留未

吾妻鏡と云建久四年三月於武蔵國入間野有追鳥狩

名不方角抄と云入間里小川有世俗と入間の宿といふり郡
の名あり 方角抄の下のまじとの
里不田の里と改せり

南向茶話云川越の城内にも業平の社を奉りてといふ
是も入間の里に居住の故あり

武野志料云入間里に於てあり入間郡をむらうとていふ
入間の郷に和号云々云々云々此の類ひ多し

按と云ふ今入間郡に入間川村あり河越の西南二里
餘に在土人の説とむらう入間里といひ中頃入間村
と傳ふ村中に天神社ありむらう在る業平朝臣は
社の西とて号とよまれむらう業平天社と稱はと
あると云ふは社に菅社云々云々業平朝臣の靈
をいふは法事あり

又齋藤敬天いふ入間川を近世むらう川と云ふ名を

得る地ありといふ人の入間里と別あり河越より
南とあり入間村と南北二村とわかれ大村あり
間と号と号體相似く誤書し奉るやこれを
まじく古の入間里なる人々余考るに俗間の文書
に片假名りて送り紙施の事多く入字の下にリ
ルを添書せし體能より後に入間とありけん
おのり又射魔と書るるといふと奇談好くあり
字を楷せしはそれと異なるは況その地令の
類とてこれも唐語とて古に邦語と進と

藤原俊成郷 藤原

さりとてやたのむれ居たりとていふゆに里にきよを入ぬる

雲わくれむのの末を交るのいふまの里やゆふた乃と

附 入間河

北條九代記に云 堀越次親家より藤田光澄武蔵國
入間河より河へゆくも清水冠者氏討

又云相模入道櫻田治部少輔貞國より六万餘騎とて
入間河へ向はる

太平記に云武務國小寺原京より打原給ふ云云軍八咽日
と約談して入間河に陣取るとる藤倉勢も三里引退と
久米河に陣をとる取らりもふ兩陣相志る其間とては渡せ六

三十餘町よたさなりけり

神明鏡に云文和三年七月廿八日基氏畠山國清武州入
間川津發向

北國紀行に云入間乃舟渡り

回國雜記に云これより入間川はありと云云此河ははきそ
さゆくの流あり水逆よりあるは流るといふ一義も傳りま
里人の家乃内より流る侍るといふ水のあつる方角也内流
こころは行方流かま下と傳りあかす一家これに誠はせ
あそ傳るといふとすかすは云々云々もこのさるなるあ
と毛也其形なる風情とて傳り

武蔵志料に云此河はよれは今川越より小川へ流る

少子流を幸さく川といふ有すはあらはれぬ多
摩郡と入間郡との界川のやうに後谷戸といふ村有
是すこのものより今村多摩郡に在

武蔵野地名考よ云入間川これ又野中にある西六つぬ
根より流れぬ荒川は落るよと云ふ又と云ふ川と云ふ凡
周流と云ふこと武拾四五里あり今も又入間河と云里あり十
里あり江戸は到古跡あり義貞朝臣この河岸に陣し
ゆふとを旧跡あり足利基氏朝臣も此所に住し東國氏
流しゆふと云ふ人よりとてさういふも此のよりあり

按とらよ入間川を秋父子此指沢の南の谷より出る業
郡落合村とて多摩郡北小本宮村より出る畑川といふ
一流と會し言業入間の間をあら入間郡と入り押邊
川と令し此企入間二郡の間流なれ荒川と入る流
いふあり北國紀行角田川を志るせる所と利根入間の
おらりあるとあるは荒川と入間川とせらるるまことあや
まりたるとあるあつと云ふ

田能武澤

松葉小載と名所抄類字名寄歌林載せず

八雲所抄よ云ふのむの沢強河とのむのめりといふるは傳勢物
語よ武彦なり

按とらよ田能武澤はよといふる入間川村天神社ありといふ

埜の川と流る下流の示すれらむの川のありと今も土人のいひ傳ふ

攝政太政大臣 藤原良經公
新古今集

意る多し多のむれは成るもいふと風の秋はゆきれ

藤原有家卿 史本集

秋の厚風よきむとく被路より誰とたのむ乃はたゆらん

田能武里

松葉ふ載と名所抄類字名寄歌林載せと

史本集よ云たのむの里武翁 藤原

按とらと田能武里と上たりる入田里此別條ありと

土人らいりされと史本松葉たきむいふとくこれと
ことこのり

源俊平綱臣 史本集

今あんと秋とたのむの里今まのむあれやと川厚乃登

三芳野

名所抄大和武藏二所と及又所吉野里大和一説武翁と

載と類字名寄松葉並ふ載と歌林載せ及

八雲所抄よ云見吉野の里武藏

史本集よ云とくむ里大和又武翁

伴勢物語よ云とくむ里大和又武翁

亦云云任と云ふ所なりける郡みよけり里なりける
真名存勢物語云武藏國入間郡三芳野郷有流
北條五代記云其のち河越の城と再兵一氏網在城
のぬぬ此城を朔定公先祖の家老太田道基といふもの
初めく城と云ふ是と聞くと入間郡三吉野の里と云ふ在又
中将のありやと云ふ一三吉野の田面の存と云ふは云々
日光紀行云河越城中も名を抄みよけり里ありきり
紫一本云云三吉野足立郡の内上吉野中吉野下吉野といふ
阿り是と三吉野といふ古奇みよけり田面の存もひこ
ふるよ君のかつと云ふと云ふ此奇存勢物語の古書
入間郡三吉野の里とあり

武蔵志料云今紫に上中下有あり云三吉野といふ
一三河といふた云三越路といふや三越路中越後
の三越を合せと云ふ一三河といふは三越路といふ
乃意と云ふ大和の吉野と云ふ一三河といふは三越路
三越野といふ是も三山と云ふなり云一三河といふは
三谷三山の越ひと云ふ一三河といふは三越路といふ
されハ三越路といふは三越路といふは三越路

武蔵志地名考云三吉野の里入間郡のちりなり云一三河
越と總名と云ふもの法も此なりあり云一三河といふ
武蔵志料云武蔵人云三吉野の里今の河越城の西と云ふ
今の城より一里なり云一三河といふは土民傳云毎年八月

十三日一必と厚の写と同とを武蔵の厚と此所集といふ
三芳野名不舊跡記といふ川越城入間郡山田庄三芳野乃
里と在

武蔵演路といふ三吉聖天神靈社川越城内落産三吉
聖とある大まに江戸町の多岐いふと上中下有と一在亦
業平の満居の和といふハい

按とあるにいふ一三よりの軍といひハ今も三吉野郷と
いふうちぬえ一武蔵國村付と三吉野郷二十村川越郡
河原上下新河原砂村南田島牛子駒林橋瀬苗圃
福園鶴馬寺尾友倉宗園計ヶ谷水子今福青柳北
入芳かり川越町と今山田庄に屬して郷名ありこれ

もむうハ三吉野郷とあり一紙後小郷名とあり一あり
と今考がし

在原業平朝臣 續後拾遺集

わのむとよるとなくあるみよりのむ乃厚紙といふのむとれん

ナニ人志ら後 伊勢物語

みよ一聖れたのむの厚もむとあり君のかとよとよとあり

後京極攝政 藤原良経公 月清集

とよ一聖の里ハあれ一秋の聖にたま紙といふ乃と門厚紙

藤原有家卿 千五百番秋合

みよ一聖のたのむとよとあり秋のけとありとあり

藤原雅経卿

みづきやたのきし原の藤すかり花よ名残乃とほれ曙
定範法印 丈木集

かきまひのさきしりの里かまへきのむれ原の松志のふらん
藤原知家郷 家集

りまいたのむの原のむれ原わよれつこよみよりしれのと
源具親朝臣 新續古今集

をりしと阿れたのむれ原のわれえん花散ころれこよりのさき
藤原忠良郷 千五百番歌合

えよりけく月をたのむれ原合やたさくはもよるとかこらん
藤原為守郷 千首

わの方ふよると思ひてさきしりの田西乃月よかふるゆりのね

慶運法印 新續古今集

たのむよりしなまきしりしれたのむの原乃まれわの程を

堯惠法師 北國紀行

春を今このよまきしりしれたのむの原乃まれわの程を

附河越

道興准后 田西雜記

かきり阿れをたふむれ原のむれ原の境を志る河越乃里

浅葉野

名寄の載と又信濃とあり松葉歌林載せり名寄抄類字に浅
羽野信濃又名寄の浅葉野と載せりといふ武蔵野

武彦野原の例として別にこれとある

萬葉集の云浅葉野

拾穂抄の浅葉野信濃或は武彦と代匠記の浅葉野
志志のよあるより第十二の阿まを野よたるは小
波と讀りといひ

和名抄の云入間郡麻羽安佐波

史本集の云あまの武藏

吾妻鏡の云浅羽庄司治承五年

又云浅羽五郎行長文治五年

又云浅羽小三郎浅羽三郎文治六年

又云浅羽庄司三郎建久六年

又云浅羽次郎兵衛尉建長二年

又云浅羽左衛門尉次郎建長三年

武藏七堂系圖の云兒玉黨浅羽小大夫行業

武藏志料の云浅羽野或書の云信濃又ハ武彦と有武彦
の阿ま事未考

武藏國村付の云入間郡浅羽庄川越領下浅羽村

又云入間郡浅間本郷上浅羽村

又云浅羽庄入西領北浅羽村

按とるに浅葉麻羽浅羽文字異れとも例の音外りた
信濃の阿まのものと相混して無かろともれも今も
入間郡上浅羽村の田の中といふ人何れ此城跡とて

稲荷の小社あり此邊淺羽郡といひと土人のいひに和
名抄信濃國郡名の下に淺羽ありて本郡と淺羽と
載されハ美事なよめふちこの淺草野にありんた

柿本人麻呂卿 萬葉集

あさと世にまゝわらふけぬがたきゆゑふわのこひいん
よき人ーら

これあおの淺草野にありて此のほあひまもこれやますれ

源俊賴朝臣 歌枕名寄

君はこそあさとち原小社つゝ志のりゝもあもふのく思

式子内親王家集

わの神のうらなもひめやこれあおのあさとれ野によかた夕霧

藤原家隆卿 續後撰集

これあおの淺草野の野にありてあはれよきあそく神と人れとめそ

同 秋枕名寄

あそく人の心あさと野にまゝわらふけ福をこころめや

藤原公純光卿 夫木集

春の浅草野のこよりのまふ雪も消やう及んゆるさあそひ

源家長朝臣

紅乃淺草のこられ草も本をまゝと深とそぬ初 晴雨のの好

常盤井入道太政大臣 藤原実成公 續後拾遺集

ふまゐるれあさとれ野によかく霧の色よいつてまゝわらふ神のれ

後之我太政大臣 源通光公 秋枕名寄

齋雨もぬりぬりけり河をせせせせよ川をわきけりきりけり

藤原為家郷 史本集

河をせせせせよ川をわきけりきりけり

同

あさき野のあけけりまけおきくがれてあけけりよきけり

藤原為藤郷 後撰撰集

夕ふれいけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

藤原経道郷 史本集

ききののしりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

堯惠法師 山園紀行

きののしりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

大屋原

名寄松葉よ哉と名不抄類字教林載をす

萬葉集よ云於保屋我波良

武彦志料よ云萬葉に伊利麻治能於保屋我波良と云

とれとれけりけり入間郡けり河川の河あり文字詳あり

そく大野のありやともいふとつら水多きれ河

系なりけりけり私名扱よ入間郡のけり大塚於保乃郷

ありそのけり回國雜記よ河越常樂寺とけり時宗経道場

侍る日中の勅聽聞のけりけりけりけり大井川といふ

河をせせせせ打渡と大井河系の水よ山やけりけり名を

やとらんと云此あるべし

武彦濱路よ云大原我原入間郡大家郷今大在家村有
大谷郷といふ一或豊島郡板橋郷

又云山條分根根板橋内大谷郷といふ由大谷郷系八板橋集鴨
の間今庚申塚のこころ代り又大井郷といふ

北川一善云大原系八足立郡之足立郡の内南村と云南の
限より東八領家村西八大谷本郷村上尾と桶川へわたりと大
谷領と云是大谷系也

橋より系系集之於保登我波良とよめるハ大原系
よりして河系の義より河にり今入間郡之大谷村あり

村より十條町山之りり系河り地河也の系といひ傳ふ俗

りと云地河やの系と云入間江頃までと云とらかりに

今も松平と多く極く東へせまりこれと松十條町

河と云これやかゝる地よりして赤城日光筑波の徳山と云て

極て勝景の地と云れりちと云河の沼といひて十間と武間

と云りの池又大亀の沼とて又又と云り此池あり中島と

系財天の社有り蓴菜多く鯉多と産とれと毎天の

池をれとととと人これ取捕らば系系といふおつと河

よりと云る此池より生ける藺かきと大谷村八方二十町

と云り何る大村と云く堀江庄のうちと云る島郡足立郡と

と云大谷系ありといふ説ありと系系にまはり

伊利麻治能於保登我原と云る其説の非ある事

論より紙待次

よまへくらゝ萬葉集

唯明法師文集

目のとれよ大登のつとむとわあゆけとさうもまゝとよとくひなつと
右入間郡

碕玉津

名取抄名寄松葉並に載と名取抄よ碕玉津よ作る
碕玉津玉郡とあり類字歌林載せと
萬葉集よ佐吉多萬又前玉

拾穂抄よ碕玉津武藏之

八雲抄よ云とれたるもの付國多と
去るに

文木集よ云とれたるもの付武藏

藤原集よ云碕玉津武藏碕玉郡

紫一布よ云とれたる碕古歌あり碕玉の郡ハ岩付の今城ある
所と是立郡乃ち大門といふ所より岩付ハ道み不自沼と
いづく七里續とるといふ大池あり此池よ付と碕玉の碕とと
きの池多と云と有る也又利根川よつきその名有る也碕玉
の郡より海を遠く

武藏野地名考よ云碕玉は碕玉郡乃内たりを云未詳
萬葉集にみえたり

武蔵志料に云、埼玉郡の津名、利根川なるを、
北川一善云、埼玉郡に津玉村あり、村の南に三町あり、
不伐川にけくさの津といふ

按、此の津玉津、此の津の部といふ、
の亦ある、利根川より流るる、
を、此池に付く、
その西に津の名ある、
少津、池の北、
名也といふ、
津をきく、
遠くといふ、

海津あり、
通、
久、
よ、

きたる、

小崎池

名、
とあり、
萬葉集、

拾穂抄に云見安に云武藏國名不之埼玉郡に在代匠
記に云た玉の埼玉郡に云武藏廿四郡の内あり

八雲傳抄に云と云たの池武藏

文木集に云小崎の池武藏

藤垣草に云小崎沼武藏

武藏地名考に云小崎池荏原郡に屬し其不詳

武藏志料に云小崎池埼玉郡於尾崎村忍城の裏に在阿

部豊後守碑石に云と云

按に云忍城の邊に尾崎村と云あり一碑石に云と云

一八埼玉村ありと云に武藏小崎沼右所名稱武藏小

崎沼即是也所者證以萬葉和歌集矣自寛平五年癸

丑歲至今為八百六十九年蓋可知其古矣此地紛紜

茲蔚中而既為隱其所夫豈可不惜邪於是勒其地名

於石以為不絕不朽云 此下は系集の歌二首を
のを今もたはつてやう 寶曆三年

癸酉歲九月望武忍城主阿部正因建臣文國平岩知雄

書に云

武藏郡村記に云埼玉郡尾崎村

埼玉郡誌に云小崎沼忍の城より東北にそ沼のなりは埼玉

玉村小計村あり

按に云忍城の東北に云るを誤なり城よりを東北に

阿部ありと云

又云小崎沼を今沼縁新田と成中程大なる沼なり菰蓮

菖杜若多く新鯉鰻鯉任りされとも海より及冬は多
多くとてく豊敷の逢ふ碑も野田の末清も浦田の縁
松中と有く寂くたる所なり

梅と多に諸書と崎玉村とある池代りく山崎の池と
されと本郡釣上村の面山と尾が崎村といふあり
この郡の池沼多き地を八毛くもけりうとむじ
池ありく山崎の池と稱せしとやさきまの山崎の池と
いふ代りく崎玉村の池をたたらこれいふるる疑し
よとくくら及 弟集

藤原為尹郷千首

されされとまのいけと鴨そとぬきおのりたを我とく物
勢

山崎の尾とたの池は秋の月とそや後代のけくまひとそ

平時親 夫木集

水鳥のやとたの池乃水とそうた新うらう後かまらむ

右崎玉郡

岡邊原

名寄松葉と載と名不抄類字歌林載せと

夫木集よとととのとく武彦

吾妻鏡よと岳邊六野太忠澄 文治五年

又云岳部平六岳部右馬允岡部六野太岡部小三郎 文治六年

又云岡部右馬允 建久六年

又云岡邊左衛門四郎文曆二年

回國雜記云岡部の系といふ所をわたりて孫とといひ
ののぬれ回れり近代関東の合戦に数万の軍兵討死
の在りて人馬の骨骸にて塚ははきく今も古墳あり
まごゆり

名取方角抄云岡部原向岡の下

木曾路記云岡部の系名取之古教省岡部六孫右忠澄
舊宅あり駿河の岡部云六孫右宅有りといふ古虚記之
武蔵郡村記云榛澤郡岡部村

按云云岡邊岡部字異なれと同處より回國雜記
以下の記皆從ふ

曾孫好忠家集

むきくはさとの系の新藤も花さく時よりありたりと書
道真准后回國雜記

る記をよむとの系の新藤も花さく時よりありたりと書
右榛澤郡

武蔵嶺

名寄松葉に載と名取類字歌林載也

藤原草云武蔵小嶺武蔵

部のはらと云ちぬ山との山より年久しくはらと云かつとも
はらと云ともいそぬる山ありたり紙村乃人むきく借ると

からけい言ともやほれの西れいひる人ともさうの志くわむ
木曾路記よ云秩父山を武蔵新峯と云ふ山也江戸の權
ちもよりみゆる江戸より峠れ方よりた
名所方角抄よ云秩父山の嶽を西のくくあり山守りんえ
たりると云名所あり武蔵根といふも此秩父山をみくりに
富士とるみえたり

國名風土記よ云武蔵國當國秩父嵩其勢鎧武者怒
立躰也依之此國之人心武也日本武尊東夷追罰之為
下給時彼嵩詣御覽吾朝人心武事此嵩故也仍吾凶徒
從大將軍然為御祈禱所持之給鳥兵具彼妙嶮大井御
嵩納埋置鳥彼武具岩藏籠故号曰武蔵又武具指置仰

有鳥故云介

江戸名取話よ云此國の中に秩父り嵩とてきた山あり
その山のさ海むとよは澄武者のたよ怒つとくまてり如
され八人皇十二代景行天皇此所宇に日本武尊を東夷と然
めんこの為よけ國よりのみひの岩れんくき坂んのみ此山
のいさひより此國の人の心り猛きことと餘國よ捕れ
たるもことりありと志ろくめ一衆今大將軍とくく
東夷の王金よそむく代責志とく人んう為よわたり頼つく
此嵩の神我軍を守りてとく自ら祈持の武具と考
のよる岩花よこのく山神と考りあり
武蔵志料よ云秩父峯武甲山武蔵嶺古くちよねと

いふ所今武甲山と相傳ふ日本武尊北東美と討平
たすひて甲斐國の山よとあひひしより武甲山といふと
いふこと播磨國の武庫山の事は同一とれとこととあ
すく年古也未とこといふ事古人のかゝるありて國よむ
まゝく字の音乃まいたいふこと心えぬことには是を別り
考へ有る事と

武藏演路よむむさし根多磨郡

按よむに武彦岩と稱よむもの程むさし野のあ
これとをかきりしるるあらしされも方角按と秩
父山とせる程あまを替これと後よ

よむ人しら及 系系集

むさしねのよむねんしるる志の春のあまをむさし

右秩父郡

蝦手山

名寄松葉よ載と名寄よむ山字未詳名不抄類字歌林
載せ及

藤塩系よむ蝦手山むさし

按よむ小蝦手山其正詳なむ及

よむ人志し及 歌枕名寄

名不しと好やまむしるるまてんれか註のあむ松をみりしるる

海比

名寄松葉に載と名不執類字教林載す

萬葉集よと宇奈比

仙覺抄よあつそひくそ其の岸也岸と春夏秋冬
かろよ夏のをといひ其をむくとみてはかあそひつ
けりそれと麻の扱ひとさうとさうといふなかり岸取
あかりとのらうと皮とさうすはる取ひくといふさう又麻
をら根取さうひくなり古今にもはさうあされと乃
志高華とよあつ岸圖をさうといひはひのりなり又
いふれ岸とよとさうとあつ心あつとさうさうみかこは
うへおろき形る儀と女の傍ありやる老女さうと

とよいをさうとさうといふなかりと海に岸取ひさうといふ老女
のこのみよ仙とれとあつとひくさうとあつとあつとあつとあつと
よとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
總國よいさうと海ウチカタカナカミ北海南といふとあつと海上の都あり
とさうと岸陰の鹿ありと岸よさうとさうとさうとさうとさうと
ありとれとあつと海のとさうと總の國あり今乃岸と
よとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
の名取とさうと海と取とさうとさうとさうとさうとさうとさうと
女壯士とあつとさうと海とさうとさうとさうとさうとさうとさうと
とさうとさうと海のとあつと男とさうとさうとさうとさうとさうと
とさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

惣よかりとよめりととて

加藤千蔭云契沖うかひハきく海色とて六世寄武

箱と定之きなうぬる海方いといふ地名あるといふ

さうらひを

藤塩草と云うかひ武蔵

按と云ん海比其和洋あり

よき人〜ら後 萬葉集

かひをひくうねいをさ〜とてこれい〜とてよあり

原田里

名寄松葉に載と名不極類字秋林載と

名不方角抄と云原田の里 入るの里の
に附す

按と云と原田の里史本集にその西紙脱と方角抄と

入間の里のり〜附〜とれと愚図とての系紙向圖と附

たるよ例せを必〜とおら〜き地とせわ〜んゆと

郡来勘のり〜六入きぬ

源伸正 史本集

あひの海のとてた乃里よなり〜りの水ひきつ〜〜とて

猪名川

松葉に載と名不極類字楳津とあり類字名寄載と

萬葉集と云猪名川

代通記よま猪名川とよめる八津の由よ伝ふる人あり
ありあるあり

八雲御抄よま井太河 撰津

藻漁草よまいふ川武州

按よまよま猪名川藻漁草よま撰りて收むといふも
其の詳あり

よま人よまらるる 藻草集

かくのよま有るよま物哉舟ふ川の字を添めてわの思ふける

大我井杜

松葉よ載と名よ抄類字教林載せ

按よまに大我井杜其の詳あり

藤原光俊朝臣 史本集

紅葉よらるる大の杜乃夕とて又たの歌山の端あり
詞書よ此界を武後野成るけるよまよまよまにやよま
見え及してお月よの香よのりよまらるるよま
おまよ見えけるよまよま

阿賀須沼

松葉に載と名よ抄類字名寄教林載せ

八雲御抄よま何よまの沼世本よまらるる

藻漁草よま何よまの沼武州

按とらに播磨郡と河野郡村あり又高峯郡と河須
村ありこれに沼ありむのへぬき沼とあり此
あり今故つゝいづる頃を佳系としたり名乃
おちるれは志をく考ふとありのこ

慈鎮和尚拾五集

年を経く引人絶及このやりの沼よは生は阿や免を

古江浦

名不抄類字松葉よ未勘國と名寄秋林載せと
交本集よ云ぬるえのうら武彦
藤塩草よ云古江浦未勘

武蔵志料よ云或云当園又云越中梅とらよ古江村載
中にあり系系十七蓋鴨のよと古江と云名寄名
あり何れは新拾遺集五月雨の古江の村いたこの浦とよ
と名寄とら又拾遺集よ古江の名とよ越中
当園よあり

按とらに古江浦交本集と拾りて收むといと其
所詳あり

遍昭僧正 風雅集

系代乃の字取かして勢の位古江のうらと松よ本名

よと人よとら交本集

阿の字の浦よありはふありとやん族の載

岩瀬渡

名不抄類字歌林並に載せしと名寄松葉に能登と載す
武苑志料と云或書と云武苑かり未詳

又云今樓と云一盤岩瀬渡森野川と云に大和國高市郡也
いとせ川の古歌よか〜後頼朝も有日本紀景行紀十
八年筑紫國巡狩の時是時於石瀬川人衆聚集と有
筑前に於武苑と云抄及といふ〜

樓と云と岩瀬渡志料或書紙引と云と授りて收む
といふともその不詳あり候

よと人〜ら及 丈本集

阿手と云に雪落つらる舟と云て渡りかたをいふとせたり

同

風を〜と云と岩瀬の渡と云をの舟待りてをとりな我

宮崎山

名不抄類字名寄松葉歌林並に載せす

丈本集と云とやと云と山武苑

樓と云と宮崎山丈本集と授りて收むといふと其
不詳あり候

中勢郷親王 丈本集

池ありはと云とつらと云と山風と云と雪と云とあり候

加茂重敏

舟とむら岩せのこころはるめてまはらぬ山吹出れ月へのけ

藤原基廣

五月雨をいそせの渡浪こゝろをさきしよよ雲をかき家

霞崎

名所抄類字名寄松葉歌林並に載せしと

丈木集よ云ふ千々の崎武彦

按ずるに名所崎丈木集と按りて収むといふも名所集より

よとくへららぬ丈木集

けるかとも名所の崎と思ふ武彦の花ゆやま海より

以知伊津

名所抄類字名寄松葉歌林並に載せしと

丈木集よ云ふいらの一作標井津武彦

按ずるにいらは丈木集と按りて収むといふも其
所詳なり

讀人志らぬ 名所集

さうあはゆるさむいいらはのむらうらうらきりあむは

氷川

名寄松葉に載しと名所抄類字歌林載せしと

史本集よまこりりの八武彦又安房備前

按よるよ今備前よまほり河といふや一國山の城
ちよるる川大川とも新白川ともいふゆとを
川といひてを皷と氷と列をよれはこりかを
前とちるせしや

藤原よまこり氷川武州

武州遊草よま入間郡氷川村よ出る室に流あり河
系と古奇よま極き一西より則て氷川の上流こり
按よるよこほり川甚し詳なれ及是是郡大宮に氷川
神社ありとむつといふ神号ありと出雲國氷川乃
よりゆきまを梓集大社の神をうつしまほり

よりなれは地川の川名よまあるかろく一されと風土
記に皷川郷皷川系と載されはそのよまてに神名
ふよりて地をもかく呼ひてしゆて皷と氷と訓
お通よれは延喜式風土記等よま氷川神社と載よ
まよこほり川と六呼はさるは備前よま今國山の城下
をなると俗ふ大川とも新白川とも呼よけ川のよま
皷川といひてとこほり川とよまよまよまその國の人
よりかれを皷河ゆかうのよまよま皷よりて氷と
轉つてよまこほり川とよまあやまほりならん志れよま史本
集よまこほり川とありは中河よりよまかこら
ほけよ氷川といひてあらよまよまよまよまよま

ついで今大宮の氷川神社のなりと云ふに云ふ川もあ
けまなりと云ふの東にありと見沼といふ池のなれ
るに風土記に載るる敷川系と云ふも阿久人此見沼に
りて六三里と云ふる大池ありと其保の頭高田與清
の祖高田友清といひ一人その任とありと新田と
云ふ事と云ふと石氏の遊多に入間郡氷川村の流
之といふも延喜式に載る中氷川神社ある地を
まはす流接かきと云ふもあはれよく郡未勅のたれ
冬これとあらせも云ふに氷川うへをかきとみえわきうつ

祐子内親王家紀伊本集

源式部

氷川氷底のくらしとくらしをわかくしと云ふも

讀人一と云

うらと云ふ氷と結と云ふり河志と云ふも

同

字と云ふ月の記のりと云ふと云ふり河志と云ふも

曝井

名寄松葉に紀伊と云ふ名不抄類字歌林載せと

系葉集よ云那賀郡曝井歌一首

拾穂抄よ那賀に紀伊の郡の名と或記よ武彦の那珂
郡といふと云代哥枕八雲御抄等曝井紀伊と云云又

代通記に此曝井を八雲所抄に紀伊と注せし勢
給り凡たこの郡といふを國とよ同名抄に紀伊
阿波伊豆石見讃岐不抄のく那賀郡ありその中に
紀伊と賀の字濁音によむべきよし和名抄に注せ
らる彼等のもの八南鷄の二字此より中傳り今の奇
名中にむらるとよむこれ八紀別的那賀とあるぬあや
たしく徳國ともふ中部の心多る紙紀伊と賀とよむ
形すりく濁音よりよむべきなる例よかたるれ又抄に
那賀といふをとも長郡といふをよむけこれ八濁音
とも注せしれざる然知かしく武蔵常陸讃岐筑前
日向よ抄のく那賀郡あり那賀と那珂とわれとも

心をいりまも中の字なるくまこれ古の奇に武蔵
小埜沼と懸しとらとけと次の二音もむらとら
へまらやかまらとも後よまらとまらるやうなれや
かまらぬ事抄ほくいんやむのれ奇なるを也

常陸國風土記に云那賀郡自郡東北挾粟河而置驛
家當其以南泉出坂中多流尤清謂之曝井縁泉所居
村落婦女夏月會集浣布曝乾

八雲所抄に云さくし井紀伊

武蔵志料に云さくしり云云此奇の上武蔵小埜沼と注る
奇何れも此奇も又武蔵の西なる事知るくし尤け奇作
者不知なり曝井と地名なり井の名は八河とさる俗説

は新井と云々も六月井成後三紙を有八辭るなり
按とらふ曝井常陸風土記八雲降抄以下と云れ
断して本州の名所とありて是と云々も拾穂抄及志料
の説より世人感ハ本州と云々此と云々ハあはれと
云々と云々も是末に附してその非と云々との事

よみ人〜ら及 弟集

みはくらの中よ向ふ曝井此絶は海らんそら素も

右郡未勘

前頭の頭は殿を漢乃日本此書の數々
あはれ卷々昭々なり見あまらぬは
師力に録りまつるに世もぬけつる
めては考へるもあまらぬ集るるかに
武藏名所考と名號するはこの國
いと廣らふ大さかれは名所と云々
定ふる人あはれ都人の傳の事
すてあまらぬと書し作りしは

あれと角田の河舟浮るさかきとあられハ
待乳山北真果とは志れうらむと百年の
後さうりか須田北渡りの廢れたらんと
雲の関のせれあへん堀蕪の井の深く患いて
淺葉北小野の淺うらぬ山田のをやまぬ忠
誠心ハ二股川の二股たのこころを狭山の
池北きやけろ考へおと四巻とながかき
うることは玉河北玉と老とおき入く田圃の

思ひうき魚人は思む人北崎玉の津北
幸いさやいと海からうを御倉よ
ぬみ飛来にまむと北本意あたこら
せらおれい乞奉會様来ふる中うとあた
人うあたうおふなむをれさふふ魚と
言乃葉をあらうををせめてくさいの
思ふあをたよをかきお入津るさ
御側近くはうらる藤原直彦舟

文政七年甲申夏四月

江戸日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

發行所

同下谷池之端仲町

須原屋伊八



